

岡山大病院

卵巣の凍結保存計画

抗がん剤影響防ぐ 戻して妊娠も

岡山大病院産科婦人科の中塚幹也講師(會巴)の研究グループが、抗がん剤治療のダメージから生殖機能を守り将来の妊娠を可能にするため、卵巣組織を摘出して一時的に凍結保存する計画を同大倫理委員会に申請。二十七

日、承認された。同科は「卵巣凍結保存は国内では他に聞いたことがない」としている。同科は、患者が完治した場合に、凍結保存していた卵巣組織を解冻し体内へ戻すことを今後検討する。

計画では、対象となる女性の疾患は、抗がん剤の副作用で排卵できず生殖機能が損なわれる恐れがある悪性リンパ腫や白血病など。適応年齢は定めていない。腹腔鏡で卵巣の一部を取り出し、液体窒素を使

い凍結保存する。凍結中、安全性を確かめるため、解冻して卵子の形状やホルモン分泌の有無を調べらる。実施に際しては、女性本人と家族(二人)の同意を求め、主治医の承諾も必要とした。保存中に

患者が死亡すれば、卵巣組織は廃棄する。現在、特定の対象者はいない。倫理委の審査では、計画について特に異論はなかった。海外では凍結保存を経た卵巣を戻した女性患者が、妊娠出産した例もあるという。同科には卵巣の生殖機能温存を求める患者も訪れている。中塚講師は「安全性が見込まれ実現可能な手法。患者の利益のためにも道は開いておきたい」と話している。

患者が死亡すれば、卵巣組織は廃棄する。現在、特定の対象者はいない。倫理委の審査では、計画について特に異論はなかった。海外では凍結保存を経た卵巣を戻した女性患者が、妊娠出産した例もあるという。同科には卵巣の生殖機能温存を求める患者も訪れている。中塚講師は「安全性が見込まれ実現可能な手法。患者の利益のためにも道は開いておきたい」と話している。